

日本の歴史地震史料拾遺別巻を読む

首藤 伸夫*

1. はじめに

千頁を超える宇佐美龍夫：「日本の歴史地震史料」拾遺別巻には、「拾遺」に掲載しなかった元禄十六年の元禄地震から大正十二年関東大地震までの 12 地震が収載されている。

2. 地震の前兆か

2-1 音が鳴る

大地震が発生したのは宝永四年十月四日 (1707.10.28) で、東海より西は九州まで影響を受けたが、その後も長く地震が続いた。

音に関する記事が〔河内屋年代記〕○大阪府河南町大ケ塚 H9.3 大谷女子大学資料館編・発行に現れるのは、宝永五年一月のことである。

「廿七日之朝辰之刻大地震、然共家崩候程之事ハ無之、四十七年以前之大地震、去年十月四日之大地震之外、此度之地震程之大地震無之候、為_レ後人ニ記ス、大地震之前二者かならず山海鳴者也 (p.53)」

さらに「卯月朔日地震小汰、三日三度地震小汰、雷鳴電光ス、四日地震小汰二度、十日_ヲ十三日迄小汰毎日二三度、十六日十七日山鳴ナル、或い云、海の鳴ナリト、然共東北方ノ方テ海ニハ非スト、十七日ニハ十四五度鳴動、野ニ居者無_レ不_レ聞之、廿一日未刻小汰、タヨル小汰、廿三日巳刻小汰、東北方三度鳴、同日昼時分_ヲ東北方十余度鳴、人尤怪ム、廿六日未_ノ刻地震嗆_ハドウカワト一汰、諸人出走、此後地震止 (p.53)」

H5.3 燕市編・発行〔燕市史 通史編〕にも、次のように記述されている。

「地震三、四日前、明け方から五ツ時にかけて毎日霧がたちこめ、ひどい時は二、三間先

の人が見えないほどであった。また、四、五日前から雲の晴れ間に見える太陽に、五色の輪がかかり、五色目鏡を見る様であったと言う。そして、山々の諸木に芽が吹き、あたかも春の気候にもどったと話す者があり、弥彦山では地震前後に山鳴りがあったと言う。」
(p.162)

安政元年十一月四日・五日・七日 (1854.12.23.24.26) にも、関東から九州にかけての広い範囲に影響を及ぼした地震が発生した。山本茂三郎著：河城村郷土史 上では、「第九節 天災地変

第五項 地震

安政之地震＝安政元年拾壹月四日数日前ヨリ大音囂々ト鳴リシカバ、人心呆然驚歎不思議ノ中ニ暮シ居タリ。料_(ハカ)ラサリキ、神ナラヌ身ノ大地震トハ、見ル々々大地振動シ来リテ地ヲ裂キ溜水ヲ流失シ、道路ヲ亀裂崩潰シ、橋梁ヲ毀シ、家屋ヲ倒潰、或ハ半潰シ、其ノ勢猛ニシテ益々毒手ヲ振ヒ、人畜ヲ斃シ、其ノ數沢水賀、和田、潮海寺ニ数人ヲ算ス。其ノ悲鳴_♠(註：口辺に動)哭ヲ發シ、痛呼、哀歎ヲ發スルニ及ンデハ、眞ニ狂煥地獄モスクヤト覺エテ戰慄セザルヲ得ザリキ。人々今ハタバ顔色蒼然トシテ藪中ニテ暮スニ過ギサリギ。此ノ惡魔少焉ニシテ退去スベクモ非ズシテ壹個月餘モ間歇ニ連發シタレバ人心今ハ浮世ノ塵慾ヲ離レテ、生ヲ求ムルニ急ニシテ、タバ食ヲ得レバ満足至極ノ有様トナレリ。サレバ地震動ノ間歇ヲ得テハ、有福家ノ倉庫ヨリ米穀ヲ_♠(手偏に曳く)出シテハ、餉ギ、近所隣家諸共地上ニ敷キアル道板或ハ葎上ヲ傳ヒ歩キ集マリテハ食シ居タリ。

此ノ時藪中ニテ出産シタル子ノ銘名ニ寅吉ト附シタル如キハ時ノ甲寅ノ兄弟ヲ取りタルカ。

沢水賀の記 (山田氏所蔵の帳簿) 小山壊レ、民家半潰、全倒數多カリケレバ、以後ハ地

*東北大学名誉教授

震予防上掘立小屋ニ住居スベキ事ト、領主ヨリ布令アリタリ。又、領主ヨリ潰家ハ、米壺斗、銭壺貫文、半潰家ハ米五升、銭五百文、給與ナシタリト。」(pp.511-512)

2-2 井戸などの異変

文政十一年十一月十二日(1828.12.18)の地震の前には、井戸水の濁り、火井の不点火等が生じており、地震後元に戻ったと記録されている。

まず、現在は大部分が新潟市西蒲区となった中之口村の〔改訂 中之口村誌〕では、次のように記されている。

「太陽暦で二月一八日の午前八時頃のことである。規模は六・九の直下型地震で、震源地は北緯三七度六分、東経一三八度九分、栄町芹山付近とみられる。いち早く発行されたかわら版は、『弥彦山は大きく崩れ、海の中へ押し出し、三条町・燕町・東御門ぜき堂・大門など残らず揺り倒れ、田畑・山川が崩れ、人馬・けが人はその数知らず、余震が一四日まで頻発した古今稀れなる大地震』と報じた。

この地震の被害地域は、信濃川と中ノ口川上流に沿った長さ二五kmに及ぶ楕円形の地域で、三条・燕・見附・今町・与板などの家屋はほとんど全壊した。被害地全般で全壊一二、八五九軒・半壊八、二七五軒・焼失一、二〇四軒・死者一、五五九人・けが人二、六六六人・堤防の欠壊四一、九一三間という大きな被害であった。被害地域及び所領別では次の図表のとおりであり、本村地内でも三条・燕に匹敵する規模であったことが察せられる。

この三条大地震により信濃川の隆起陥没があり信濃川の河筋も動いている。国道八号線の大島地内を通りかかると、一六〇年過ぎた現在でも堤外の野菜地帯に地震前の河筋の状態をうかがえ知ることができる。

文政十一年は気候が不順で凶作であった。その上、一〇月五日に屋根石を吹き飛ばし、大木を吹き折る大風に襲われた。三条の如法

寺村〔注：現在、三条市如法寺(によほうじ)〕では、越後七不思議の一つに数えられていた火井が一〇月中旬頃からどうしたわけか点火しなくなった。そのほか清らかで美味であることが広く珍重されていた井戸水が濁ったり、村人たちはことさらに不安を感じていたという。〕(pp.153～154)

2-3 発光現象

〔改訂 中之口村誌〕には、光に関する異常も記述されている。

「(文政)地震の数日前から、毎日明け方に霧がたちこめ、ひどい時には七～八m先に立っている人さえ見えないくらいであった。そして空が晴れ渡った時には、太陽のまわりに五色の虹のようなものが見えた。しかも、暖気で高い山にも雪がなく、木々が芽をふいたり、ツツジやツバキ・タンポポなどが開花するなど、しのぎ易い気候だったという。」

(p.154)

〔燕市史 通史編〕にも、次のように記述されている。

「異変続き

文政十一年(一八二八)は異変続きであった。六月半過から雨が降り、西川の西方流域、東は桜林(現巻町)より一帯雨で迷惑、悪作で困窮も著しかった。七月下旬、八月より米の値段が上がり、十月頃は一俵金二分あまりとなり、諸方で穀留めがなされた。上保内村(現三条市)の長泉寺(真宗大谷派)の井戸水は名水で珍重されていたが、六月頃より薄く濁り、言い伝えによって変事が起こるものと村人はあやしんでいた。如法寺村(現三条市)では、越後七不思議の一つに数えられていた火井が、十月中旬頃から点火しなくなり、地震後再び点火できるようになった。

地震三、四日前、明け方から五ツ時にかけて毎日霧がたちこめ、ひどい時は二、三間先の人が見えないほどであった。また、四、五日前から雲の晴れ間に見える太陽に、五色の輪がかかり、五色目鏡を見る様であったと言

う。そして、山々の諸木に芽が吹き、あたたかも春の気候にもどったと話す者があり、弥彦山では地震前後に山鳴りがあったと言う。」(pp.161～162)

2-4 大気の変化

長野郷土史研究会〔長野 第一八一号 特集 地震〕H7.5.1によると、弘化四年三月二十四日(1847.5.8)の善光寺地震の際に見られた現象についての記述がある。

「善光寺大地震 屋代地区を中心に：半田照彦

一 はじめに

善光寺大地震について、更埴市屋代に「大地震日より以後日々変動日記」(村山源五右衛門記)と同市森に「徒然日記附地震大變録」(中条唯七郎記)が残されている。

村山源五右衛門(一八一〇～一八七二)は屋代用水堰の堰守を松代藩より仰せ付けられ勤めていた。また俳諧にも勝れ近隣にもその名を知られた文化人であり、新町組の名主も勤めた。

中条唯七郎(一七七三～一八四九)は和漢の学を納め、算術・謡曲などに勝れ、多くの門弟が彼の教えを受けた。また森村の名主を勤め村政にその手腕を発揮した。今回はこの二人の日記を中心に当地域の地震についてのあらましを記してみたい。

二 地震発生とその直後

「三月二十四日(太陽暦五月八日) 今日天気よし夜に入り四ツ頃大地震あり。中河原病死勇左衛門忤申し候は、その地震以前戌亥の方より東南の隅へ白き気あると思いが、そのあと直に地震あり、地震翌日まで昼夜間断なく、その心地船に乗り候様なり。皆人宅中にこれあることなり兼ね、皆庭に出候て終夜これあり候なり。諸方共により潰れ候て、そのまま爐中より火起り忽火事となって、諸方に火事これあること。今夕北の目あたり西へかけて、山中辺へ火事村々あり、右目あたりより東北隅へかかって、これも火事多分にこれあり候。」と記されている。地震発生直前に発光現象があり直に震度七～六級の強い

地震が発生したことがわかる。

矢代村では、潰れた家は、七兵衛・嶋蔵など八軒、大いたみの家は祖左衛門・七郎兵衛の家二軒、「その外いたみ申候家あげて数え難し」とある。また即死人は、茂左衛門・嶋蔵妻子など九人と記されている。

二十四日の夜から二十五日の朝まで、間断なく余震が続き、八〇回とも一〇〇回ともいわれ、村人は「船に乗りたる心地にて、皆々仰天顔にて庭にてばかりこれあり候」と記されている。」(p.254)

3. 幻日：二つの太陽

嘉永七年(安政元年)十一月四日・五日・七日(1854.12.23.24.26)に発生し、関東から九州にかけての大地震の際に、複数の太陽が見られる幻日が発生した。

〔水呑町史〕○福山市 S52.4.20によると、「十三、地震と津浪

嘉永七年十一月四日の朝四時より、安政二年までに所謂豆相大地震を、備後にも数十回感じ、大気の異変で水呑より太陽が二つ昇るのが見られ、津浪襲来、被害甚大。」

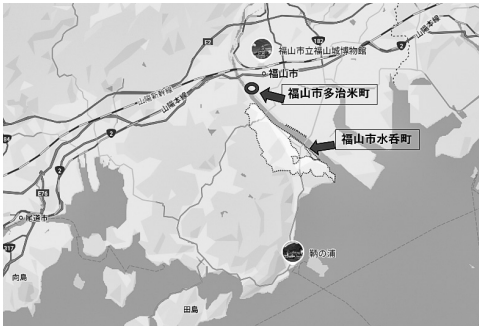
〔福山市多治米町誌〕H5.7では、

「さらに安政元年(一八五四)十一月四日から同月一五日までに起こった東海道沖地震は激しかったようである。

この安政元年地震は特に五日が大震し、この日を中心に三〇回余りも震動したすざまじいもので、西は山陰・山陽にも及ぶという広範囲な地域に被害を出している。太陽が二つ昇ったと騒ぎ、土地亀裂し住民野宿するという。

福山は、「当国福山城下内、深津村人家いたみ多し、尤もつとも古き家甚し、神村にて田中より水新に吹出し、下は川と成、其外所々其類多し、…」(菅波信道一代記)などと被害の状況を伝えている。深津郡役所家屋も倒壊したようで、このような地震はいまだかつて経験したことのない大地震という。」(p.656)

両市は図-1のように瀬戸内海に沿った場所に位置している。



図一 多治米町・水呑町 (Google map より作成)

4. 地震と大風の二重苦

地震で生じた地滑りが川をせき止め、それが壊れて洪水被害につながった例は良くあるが、地震の後にそれとは関係のない大風で被害を受けたというのが、新潟県三島郡与板町である。2006 年 1 月 1 日に長岡市に編入されている。H2.6 与板町史編修委員会本田雄二著「町史よいた第 1 集 文政大地震と与板」は次のように記述する。

「二 与板における町方の被害状況 (前略)

次に、文政大地震による与板町内の被害地図（「文政十一子年十一月十二日地震ニ付」与板町歴史民俗資料館蔵）によると、町場全体の被害状況は、焼失一七軒、潰つぶれ家二六三軒（正確には二五五軒）、半潰九六軒（正確には一一二軒）、大破四〇八軒、土蔵潰一〇、土蔵破損九一、即死三四人、けが人一一八人、神社破損はなく、寺庵大破九軒、社家大破二軒となっている。表 2 は、町名ごとに被害状況を集計したものである。この集計によると、町場全体で約半数に当たる三八六軒が、半潰以上の重度の被害を受けている。

このような状況のなか、五月に「当地では四、五十年間に聞き及ばない」ほどの大風が村々を襲った。いまだに仮小屋住いであった者は、屋根が大半吹き飛ばされ、家財道具が散乱するという被害を受けた。畑作物の被害も大きかった。さらに、秋にはまたしても長

雨にたたられ凶作となった。こうして、文政大地震による痛手が癒えきらないまま連年の凶作となり、いわゆる天保飢饉へとつながっていくのである。」(p.190)

5. 和歌を詠む

災害の記録をする際、和歌を詠むことはしばしば行われている。

例えば、弘化四年三月二十四日 (1847.5.8) [北信・上越] の地震についての、森銑三・北川博邦監修：吉川弘文館〔日本随筆大成別巻 10〕S58.4.30 の中にある「(巷街贅説) 塵哉翁著文政十二年自序」では、次のようになっている。

「○信濃国大地震

諏訪郡高島御城下、西の方百四十餘村、此内すわの海あふれ上りて、人馬家々多く震り流す、佐久郡弥強く、家蔵大地へめりこみ死人多し、安曇郡北の方百三十餘村破損多く、此外悉くは筆紙に尽しがたし、村々在々老たるを助け幼きを連て、めう火にむせび泣さけぶ声、天地に響きて夥し、殊更に善光寺如来当時開帳ましまして、諸国より参詣群集なれば、又怪我も多し、其騒動大方ならず、此大震に善光寺坊舎も、残りなく震倒したれ共、御堂はつゝがなくおわす事、三国一体の霊仏と申べし、廿五日に至り追々に漸く震納りぬ、御代官御地頭より御手配ありて、人民を助け出火を取鎮め、大水をふせぎ給ひ、爰においてやうやうに安堵の思ひをなせり、前代未聞の珍事なれば、其荒増をしるす、

神国のしるしぞ見えてかしこくも震納めたる万世の御代

地は震ふるひ山は崩くずるゝ世の中に何とて弥陀^{みた}はつれなかるらん

此度は床^{とこ}も取あへず潰^{つぶ}れ家^やのもみあふ人は壁^{かべ}の間に間に

善光寺しなのでなくて死^しぬのとはゑんぶだごんの一言もなし

はるばるの道を詣でし善光寺地震^{ちしん}にあふてとんだけちゑん

草臥^{くたびれ}ぞん、路銀^{ろぎん}がそん、命^{いのち}

が大そん、
是をや三損^{そん}のむだ如来によらいとやいわん
歟、」(p.199)

さらに
「冠狂下も百人首
歎^{なげ}くとして帰^{かへ}らぬものとおもへども
かこち顔なる我なみだかな
親や子のけふは七日よ四十九の
うきにたへぬは涙なりけり
地震^{ちしん}して跡^{あと}は野原のほらと成にけり
たゞ有明の月ぞ残れり
あちこちと吹出したる泥^{どろ}水は
われても末に逢んとぞ思ふ
苗代^{なわしろ}も震崩^{ゆりく}ずしたる埋^うもれ田に
哀れことしの秋もいぬめり
妻^{つま}や子が尋^{たづ}ねて来ても死わかれ
かひなく立ん名こそおしけれ
尋^{たづ}ねれど問^{とふ}人もなき焼野原^{やけのはら}
今一度の逢事もがな
夫ぞとはしらで参りし善光寺
けふを限りの命ともがな
泊^{とまり}たる宿^{やど}も焼^{やけ}のと成にけり
なほうらめしき朝ばらけかな
開帳でしぬも前世の約束^{やくそく}と
人をも身をも恨^{うら}みざらまし
我ばかりつれなく友に死わかれ
あまりてなどか人の恋しき
三尊^{さんそん}のみだはさぞかし歎^{なげ}くらん
人の命のおしくも有かな
浅間山のけぶり立止て、其火気地に鬱伏して、
此度の震災ありと流布せるに、三とせ
あまり浅間^{あさま}の煙立^{けぶりたち}やらで
信濃越後^{しなのゑちご}の震^なへのはげしき」
(pp.203-204)

6. 謎かけ

和歌と同様に、地震、災害、人間行動を取り上げ、謎々も作られた。関東から九州にかけて大被害をもたらした、改元を促した安政元年十一月四日・五日・七日(1854.12.23.24.26)では、次のような記述、〔大日記〕○桜井市生田高瀬道常記がある。



図-2 桜井市の位置 (Google map より作成)

「津波地震^{なみ}なそ掛
清水寺と掛てナント、クしわんほうの敷財ト
とく心ハ舞台飛しや
霜月五日の夕方 利の高い質 沖なりしや
津波の大船 なんこのはん はし打てしや
道頓堀川の大船 づほらな和尚 大黒と留て
いる
天王寺の塔と掛てナントク上手の関取とト
ク心ハこけそうてもこけぬ
気のよわい女中 荒物やの歳墓 抱おこして
しや
瀬戸物町 芸子のかね付 裏物割てしや
大地震の念仏 香物の口あけ しんから出して
じや
住吉の灯籠 すほうなけい 大方こけている
大津波 茶や突と出し 劔先引出たしてしや
此度の大津波 俊寛そうず 忘テ流ししや
おきはんの酒 ゑらい俊き人 利に人としま
ふ
津波地震 不気悪な娘さん 二度ひっくりし
や
芝居の看板 正月の白眼^{ニラミ}鯛 出た俵て手
うつらぬ
町々のはんこらや きせるのそうし づを出
してしや
今度の津波 やすいおやま 紀州のえらい崩
掛た橋

はたこや 人留てしてや

鳥羽表の津波 頭わるい類もし 皆つふて
居る

へたり掛た家 流れかけた質 突張して益
てしや

大道の夜明し 春先のもち 星か見へる

へたり掛た家 馬場先の茶や 丸太て持て
居る

道頓堀川の船 米相場 おいおい下る」

(pp.618-619)

7. 長く続く地震

7-1 宝永地震

大きな地震の後には余震が長期に渡って
続く。

宝永四年十月四日 (1707.10.28) の地震は
東海地方から西は九州に至るまで影響した。

〔「朝倉家所蔵細谷村記録」抜粋〕「上細谷(註:
かみほそや)村誌」中西一郎氏提供

「○宝永四亥年十月四日、九ツ過時分大地
震、午未ノ方大分鳴り、八ツ時津波ニテ村々
網船漁道具残ラズ流失、谷ハ山に埋まり、山
ハ崩レテ谷ニナリ、人馬共死ス。赤澤兩伊古
部に三四ヶ所五七町四方ノ海中濱ニ嶋山出
来申候。

十月十一月十二月迄日ニ五度十度ツヽ震フ、
翌年正月閏月子ノ年中、月に一二度ツヽ動キ、
人々野山畑中ニかりや、口ぶかみ其外はり渡
世スルコトニヶ月ナリ。」(p.45)

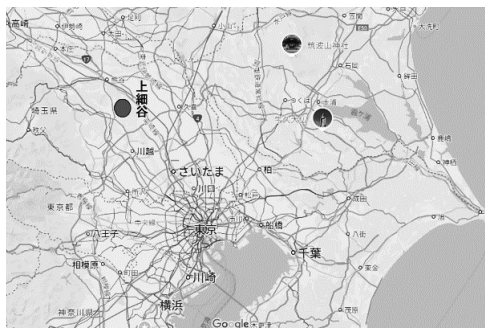


図-3 上細谷の位置 (Google map より作成)

おなじ頃、大阪地方でも 10 月 4 日に始まる
地震に襲われ、一年近く続いている。

〔河内屋年代記〕○大阪府河南町大ケ塚
H9.3 大谷女子大学資料館編・発行によると、
「十月四日昼八ツ時分大地震、大ケ塚善念寺
御堂午ノ三方ノ壁崩落、台所大破、其外小家
崩候事四五軒、壁落候家数」(p.49)

これに続き揺れの回数の記述が続く。その
中で汰と云う表現が頻りに現れるが、これは
ユリと読む。

「同四日ノ夜五度汰

同五日昼夜十度ほと少ツヽ少ユリハ人不知
アリ、知者アリ、夜ハ多無ニ知人

同六日昼夜五六度 少

同七日昼夜五六度 少

同八日昼夜六七度 少

同九日昼夜八九度内二三度中汰

同十日昼夜二度

同十一日夜一度

同十二日昼三夜一度

同十三日暮一度中汰、夜三度小汰

同十四日昼二度夜三度皆小汰

同十五日日暮一度夜二度

同十六日夜二度

同十七日無事、初夜一度、八ツ一度

同十八日一度 紀昶札ノモメ、石川札モメ申
候

同十九日二度

同廿日

同廿一日暁一度少

同廿二日暁一度吉程

同廿三日暮ニ中汰、近年此汰程ノ地震ハ無之
候

同廿四日巳ノ下刻ニ大汰、四日ノ大汰以後ノ
汰也、諸人以外騒動

廿五日ノ廿八日迄地震少ツヽ汰申候

卅日ノ夜亥刻ニ地震中汰、不レ知人無之

(十一月) 廿三日富士山之内ヒノキダイラト
云山ガ火モユル、火ノ高サ富士ト等

(上欄外)『廿三日関東ニ砂灰フル積ル事
二三寸』

廿日午ノ刻二度地震ス

(上欄外)『廿八日夜地震』

(十二月)十八日ノ夜地震、是迄少々汰申候
事数不知

廿一日ノ夜方廿二日迄地震五度

(宝永五年正月)十三日ノ地震

廿一日地震少シ、廿二日地震中汰、廿四日小
汰、廿六日ノ夜中汰

(閏正月)二日ノ夜少地震、五日方十九日迄
毎日少宛地震

廿一日夕地震

廿七日之朝辰之刻大地震、然共家崩候程之事
ハ無之、四十七年以前之大地震、去年十月四
日之大地震之外、此度之地震程之大地震無之
候、為後人ニ記ス、大地震之前ニ者かならず
山海鳴者也

廿八日之卯之刻ニ少シ地震、人多クハ不知
(二月)

六日朝少地震

殿様方此度地震ニ付御城之普請ノ夫役也、但
毎年夫米上候故トソ二月十一日夫役御免之御
触御廻状

二月廿五日夜明方ニ地震中汰、人皆出宅、廿
六日ノ夜小汰、人多クハ不知

三月十九日ノ夜地震中汰、廿日夜地震小汰、
廿七日ハツ地震中汰、御堂ニ而法談の最中、
聴衆不殘立騒ク、但当月十八日迄地震汰不申
候ニ付、諸人悦申候所ニ十九日方汰初、人ヒ
ト皆消肝

卯月朔日地震小汰、三日三度地震小汰、雷鳴
電光ス、四日地震小汰二度、十日方十三日迄
小汰毎日二三度、十六日十七日山鳴ナル、或云、
海ノ鳴ナリト、然共東北方ノ方テ海ニハ非ス
ト、十七日ニハ十四五度鳴動、野ニ居者無不
聞之、廿一日未刻小汰、タヨル小汰、廿三日
巳刻小汰、東北ノ方三度鳴、同日昼時分方東
北方十余度鳴、人尤怪ム、廿六日未ノ刻地震
嘩乎^{ドウカワ}ト一汰、諸人出走、此後地震止

五月十八日ノ初夜時分地震中汰、閏正月廿七
日ノ汰ノ次也、諸人走出ル、廿一日迄小汰有
廿八日之卯ノ時文太郎妹出家せんと欲して太
子へ行六月朔日石川川原新開^{ヒラキノ}義ニ付大
坂方御廻状

五日七ツ時分小ク地震、相筈大山ニ六月十二
日雪五尺ツモリ候

(七月二日)同日昼時分方大風大雨、木綿蓑
簷(蓑)ヲ損ス、去年八月ノ風方モ甚シ、或
云ク、先月方於武江人多ク失ス、是天狗ノ所
以也ト、此度之風之義方タニ而大木を吹折、
家を吹たをし言語道断之義也、**風と共に二度
地震ス**、下ノ水分之石之花表^{トリキ}、去年地震
ニタヲル、当春笠木を上ヨク致候所ニ此度之
風ニ而吹落シ候、京都ノ大風家をやふり樹木
をたをし、其上大雨いたし洪水家を流し候、
七月廿二日方持寛師講太子伝

七月廿七日小地震、

(八月)十九日ノ夜地震中汰、人皆知ル、夜
半時分廿六日之昼七ツ時分小汰

(九月)五日ノ夜中地震、人皆知之

十月四日丙午、去年十月四日亦午ノ日ナル故
諸人怪之、

早天方天晴、一点モ無雲、然共無事成故、人々
悦之、

或曰、右衆人ノ怪有故乎、予云、地震ハ天
下ノ災難、衆生ノ悪業ニ依テ有リ、然ハ去
年ノ十月四日ハ悪業ノ感スル時也、非日ノ
善惡ニハ、何今年ノ四日復有地震、若神鬼神
明ノ慎イカリトイ(ママ)ハ、其日ニヨルヘ
シ、万人ノ悪業所感ナラハ日ニハ不^レ可^レ依」

(pp.52-54)

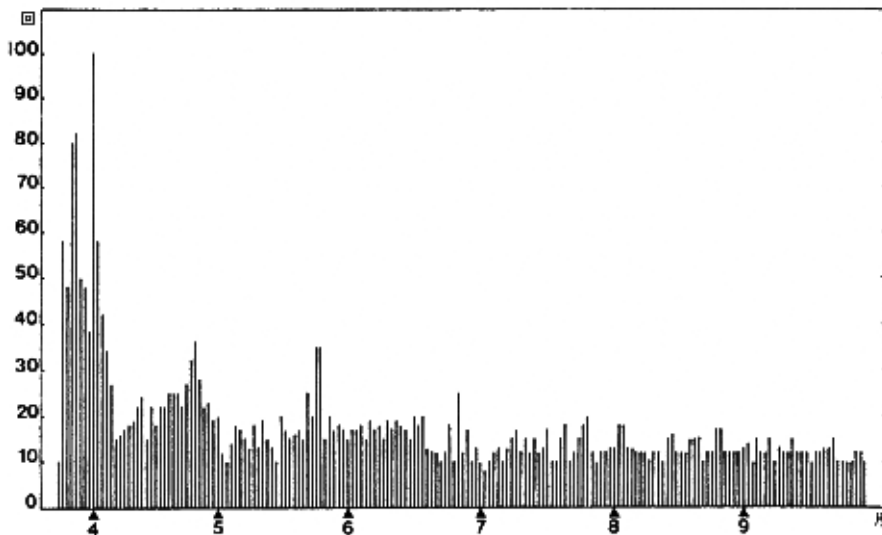
7-2 図で示した余震の経過：善光寺地震

図Ⅲ-39 善光寺地震の余震有感回数とし
た図は、柏原町区誌 S63.2.29 発行によるが、
これについての説明はかかれていない。しか
し横軸の単位が月となっているのを見ると、
毎日の余震回数の経過を示したものであろ
う。4月初めには一日100回近い余震があっ
たと思われる。この柏原町区誌の関連記事は、
次のとおりである。

「三、善光寺大地震

善光寺大地震

弘化四年(一八四七)三月二四日(現在、五
月八日)夜亥の刻(午後一〇時頃)、信濃
から越後にかけて、マグニチュード七・四
と想定される大地震がおこった。震源は善
光寺の西山中、虫倉山付近で、善光寺町が
最大の被害地だったので、俗に、善光寺大



図III-39 善光寺地震の余震有感回数

地震と呼ばれている。

地震の範囲は、北は北国街道に沿って日本海に至るものと、千曲川に沿って信越国境に達するもので、南限は上田市と松本市付近までの南北約八〇km、東西二〇～三五kmである。信濃川（千曲川）地震帯に沿うものと、構造線に沿ったいずれも地盤の悪い地質上に広がっている。

全体の被害は倒壊家屋三四、〇〇〇戸、死者一二、〇〇〇人であるという。柏原村の被害は、表Ⅲ-76にまとめた。被害の具体的数値は地震後の混乱によってまちまちであるが、これは、三カ月後に一軒一軒の被害を詳細に調査してまとめたもので、真びょう性の高いものである。柏原全村では、全壊居宅九六・土蔵二一・物置四三・雪隠六四・半壊居宅四六・土蔵八・物置二である。死者三九名、被害者数九〇六名で、約六割が地震の被害にみまわれた。柏原宿に限定して被害状況を一覧にしたのが表Ⅲ-75である。被害戸数七三戸で、宿の五、六割、被害者数四三一名である。

なかでも、問屋六左衛門は居宅、土蔵二棟、酒蔵、物置、御殿、門、扉塀など六棟余が全壊し、即死一名、怪我二名、死馬二頭で被害が大きかった。馬喰権八は、居宅、

物置、雪隠全壊のほか、預り馬五頭と自分の馬一頭、計六頭を一瞬に失った。赤渋の要右衛門の家では、女房、倅、娘の三人が善光寺参詣に出かけて、被害にまきこまれた。

地割れや土砂くずれが発生して、水田や用水路にも被害が及んだ。針ノ木の溜池の土手がくずれて、細谷の田畑や用水路が土石流で埋まった。また、諏訪神社南の崖がくずれ、宮原の田畑が土砂で埋まった。田畑の被害は、一四筆、三反四畝二五歩、石高にして三石三斗四升三合の損害である。山桑堰は、総延長三二〇間のうち、三カ所計二三〇間に地割れが入るなどして通水困難になった。大久保溜池の土手は六カ所でくずれた。

さて、地震後の人々の動きを「大地震日記」を中心にみていこう。被害はすみやかに役所に報告された。翌二五日早朝、六左衛門の兄と百姓代権左衛門の二名が代官所に向かったが、いれ違いに、手代奥野林助ら五名が視察にやってきた。とりあえず、鰥寡孤独^{かんか}こどく貧窮の者に金二朱の救済金が与えられることが約束された。柏原では、一四名の者がこの救済金を受けた。役人は兵左衛門宅に泊り、翌二六日は野尻

を視察、古海・熊坂はほとんど被害がなかった。ので、昼食を柏原ですませ、坂上組合、野村上村方面に出発した。

四月一日には、手代萩野広介が徳左衛門宅に宿泊した。宿方へ人足二〇人の貸与、柏原、大古間へ一〇両ずつ、野尻二〇両貸与の下賜があった。この金は、宿方では返済しなくてよいものと思っていたが、実際は一〇年賦償還となった。

四月九日から大風雨となり、銀右衛門のりんごの木を吹き倒したり、権八のすももの木が中折になったりした。

一〇日の朝五ツ時（午前八時頃）、また大地震となり、皆庭へ飛び出した。余震はずっと続いており、松代では七月まで確認されている。柏原でも時々ゆれて、人々の不安は消えなかった。

田植前に、山桑堰は仮普請をしてなんとか通水できるようになった。四月二十三日に、田植始の相談が行われ、次のような取りきめがなされた。

1. 例年通り、組中で良い苗から先に植る。順々に植えて夜までに植え終え、残りの苗は役元へ差し出すこと。
2. 田植の朝は未明からはじめて、朝飯は自宅ですませ、昼食は持参し、できるだけ粗食にすること。
3. 水上の者は、水下の者のことを考えて水を使いすぎないこと。
4. 家の繕普請、新規家作の場合もすべて倹約して、壁のりなど成丈手塗りにすること、身分相応に行うこと。

四月二十八日（現在、六月十一日）、田植えとなった。細谷、宮原の田は、この年田植え付けできなかった。

五月一日、幕府の役人が視察に訪れた。御勘定直井倉之助は喜左衛門宅、御普請役小林大次郎は兵左衛門宅、手代奥野林介は徳左衛門宅に宿泊した。

六月二十一日、七月三日、五日も大地震だった。

幕府から貸与された援助金は一九六両二朱（永えい一九六貫一二五文）に及んだ。

四月	宿勤人馬のため	一〇両
五月	急難御救拝借金	八〇両
十二月	再拝借金	三七両二朱
	田地用水路修理費	一二両
翌年二月		五七両

急難御救拝借金八〇両は、極難の者一戸あたり一両の配布予定であったが、現実には、本村三一戸、大久保一二戸、赤渋七戸、仁之倉三四戸、熊倉八戸、計九二戸に配分された。しかし、七月になっても、家作、修復ができず、再度借用を願い出た。その数は三六戸にも及び、当初の三分の一にあたる。この結果、一二月になって、再拝借金が配布された。全壊一戸につき金三步、半壊大破一戸につき金一步二朱、半壊小破一戸につき金二朱と錢四〇六文である。本村四戸、赤渋七戸、大久保一二戸、熊倉八戸、仁之倉三四戸、計六五戸がその対象となった。本村のものがほとんど再拝借金を受けないですんだのは、別に宿助成金を受けることができたからであろう。

田地用水路補修として与えられた十二両のうち、土堤用水路補修として三両、田地大破の者七名へ九両を配分した。翌年になって貸与された五七両は、個々に配分することなく、役元で預り今までの借用金の返済金の一部にあてられた。

受領した一九六両二朱は、一〇ヵ年賦で返済した。一ヵ年に永一九貫六一二文五分ずつである。（永一貫文は一両にあたる。）本村で、借用した者は三十五名で、ほとんどは一年に永一〇〇文の返済であった。この返済状況をみると、拝借金として援助は受けられても、その返済に、拝借金の一部をそのまま返済金の一部にあてるなど、楽なものではなかった。返済の困難さが、借用金の一部をそのまま返済金にあてるという矛盾した行為を生みださせた。凶作、災害における借用金の返済が、年貢に加算されて難渋した経験が、柏原にみられるようなおかしな借用金の使途となったのであろう。」（pp.325-328）

8. 宝永・安政の比較

高知県西南部に位置し、現在は幡多郡黒潮町となっている大方町（おおがたちょう）の『大方町史』である。

「六 安政の大地震」

黒船来航で日本国中が湧きかえった嘉永六年が暮れ、翌年の十一月五日、入野郷はマグニチュード八・四の大地震に襲われた。嘉永七年は干支えとの寅の年であったので『寅の大変』と呼ばれ、『嘉永の大地震』とも言われるが、地震後二十二日たった十一月二七日、『安政』と改元されたので、『安政の大地震』というのが一般には通用している。

この地震を体験した老人がまだ生き残っていた大正年代には、大地震とそれに伴う津浪の恐ろしさが言い継がれ、浦部落の田野浦などでは毎年旧暦十一月五日に『大潮まつり』といって、部落総出で氏神様に集まり、半日のおこもりをする部落行事が残っていた。

昭和に入ると、いつの間にかその風習がすたれ、地震と津浪の恐ろしさを口にする者がなくなっていた。まさにその時、昭和二十一年の南海大地震が起こったのである。寺田寅彦の名言『天災は忘れられた頃にくる』のとおりである。

安政の地震については、旧『大方町史』に町内に残っていた資料、伊田の小野桃斎の『大潮大変記』、八幡様境内に建てられている野並晴の『安政津浪碑』をはじめ、鞭の池内寿之助・宮地真知、蜷川の老助七等が残した記録によって詳細に述べられているが、今回はそれとは別に当時まだ世に出ていなかった二つの資料を紹介し、その一つについては全文を引用し、今から一三〇余年前の大津浪の惨状を伝えることにする。

資料 1, 安光南里『大汐筆記』

『大汐筆記補』

この資料については、南里の後裔で、現在尼崎市在住の安光奎祐氏が、大方町老人クラブ連合会が昭和六一年一〇月に発行した『大方よもやまばなし』の中に、『大汐の記』として発表している。読み易く現代文に書き替

えてあるのでよくわかる。

なお『大方よもやまばなし』の中には、前記『大汐の記』と並んで、『大変の事』（嘉永七年の大地震による津浪の記録抄）という題で、秋田直老人クラブ連合会長が、加持の谷音吉の記録を現代文に直して抄記している。

資料 2, 上岡薇峰『桑滄談』

上岡薇峰は入野の医師上岡良朔の次男で、幕末から明治にかけて活躍した医師であり、漢詩人であり、新聞記者でもあった当時の知識人である。藩主の祐筆となり高知に出、明治になってからは高知新聞などに執筆し、文才をもって称せられたという。

『桑滄談』は、南里の『大汐筆記』のように、地震直後に自らの体験を描いた生々しさはないが、後年になって、当時の状況を回想しながら書いたと思われるようなゆとりがあり、客観的な描写になっている。内容が入野在住の者でなければ書けない迫真性があるので薇峰の筆になることに疑いはないが、いつ、どこで発表したものであるかわからない。『中村市史』に引用されているが、編集者にも原拠がわからないそうである。孫引きになる

が『中村市史』に出ている全文を、現代的な送りなをつけて左に引用することにする。

（注、省略、『中村市史 続編』参照）

鯉節 流失 数	死 馬 牛 数	半 亡 所 の 郷 数	亡 所 の 郷 数	半 亡 所 の 浦 数	亡 所 の 浦 数	損 田 石 高	負 傷 者 数	死 亡 者 数	流失 破 損 船 隻 数	流失 家 屋 数	倒 壊 家 屋 数
五〇八、 〇〇〇節	五四二頭	三三村	四二村	四浦	六一浦	四五、 一七〇石	九二六八 人	一、 八四四人	七六八艘	一、 一七〇戸	四、 八六六戸
一五〇、 〇〇〇節	三八頭	〇〇	〇〇	〇〇	四浦	一四、 一二一石	二七二人	三七二人	七七六艘	三、 一八二戸	二、 九三九戸

宝永の大地震

安政の大地震

『皆山集』巻六の第八章地震の部に、土佐の地震の記事が集められている。その中から宝永地震と安政地震の災害状況を、幕府に報告した数字で抜き出し、両者を比較することにより安政地震の被害について考えてみたい。

右の数字が示すように、藩全体としては宝永の地震よりは安政の地震の方が被害はずっと少ない。比較的軽い被害ですんだのは、宝永の時よりは津浪の規模が小さかったからである。その時に残された記録から考えると、安政の津浪の高さは六～七メートル、宝永のそれはその二倍近くもあったのではあるまいか。

大方町のように海岸線が長く、平野部が海に面している土地は、大地震による被害よりもそれに伴う津浪の被害が遙かに大きいのである。安政地震から九二年後に襲来した南海大地震で、中村市に較べて大方地区の被害が少なかったのは、南海大地震に伴う津浪の規模が安政の場合よりずっと小さかったからである。

『桑滄談』の桑滄とは「桑田変じて滄海となる」という中国古典の一節からとって名づけた題名であるが、東西の田丁は一面の海となり、園圃は渺々たる白砂となり……満目一点の青なし。

という上岡薇峰の目にうつった入野平野の描写は、他人事として読み捨てるべきではない。

この地震から四年後の安政五年の春、幡多に来遊した高知の俳人防意軒半開の『幡多郡紀行』の中に、

猪石数右衛門方へ立寄り、過日の礼を述べ。あるじは中村非常の事に立越し、妻女ねもころにして午時飯を調べて出づ。

此辺も寅の大変に家多く流失し、新しき軒もあれば又己屋(小屋)作りもありき。

と書いているように、入野本村の庄屋屋敷近辺でも、地震から四年たっても、新築の家にまじって、小屋がけの仮屋でがまんしていた人たちもあったのである。」(pp.694-696)

9. 200m を超えた津波？

愛媛県の西端で九州の方へ伸びた佐田岬半島、その中ほどの塩成地点では巨大津波によるのではと考えられた植物がある。〔瀬戸町誌〕には、次のように書かれている。

「四 嘉永大地震

嘉永七年(一八五四)、安政元年と改元されたが、十一月五日から、十日にかけて、近畿、四国、九州にかけて記録的な大地震があり、それに伴い、津波が発生し、三机浦においても相当な被害をもたらした。

当時の状況について、塩成「阿部家古文書」、田部「梶原家萬留帳」に記録が残されている。

.....

記録にも記されているように、嘉永大地震は、安政元年(一八五四)十一月五日、午後四時ごろから、ゆり始め、十日にかけて継続して発生し、夜昼間断なく継続し、住民は恐れおののき、住家を出て、畑に臨時小屋を建て、飼育している、牛馬もろともに避難している。準備が早かったためか、後から襲来した大津波も、人畜の被害は、記録されていない。川之浜でも、文書記録は残されていないが、口伝に残されているのは、ほうの木(砂浜の植物)が河内(塩成大川源流)に生えているのは、津波に打ち寄せられたのだと。

海拔二五〇メートルを超える現地に、いかに津波でも、あがる事は荒唐無稽としてかとられないが、当時としては、そのくらい評価されるほどの大災害と記憶されたのである。」(p.679)



図—4 塩成の位置 (Google map より作成)



図-5 伊方町ハザードマップ

現在の伊方町津波ハザードマップで見ると、図-5 のようであり、塩成で 8.78m の津波高と想定されている。

<https://www.town.ikata.ehime.jp/uploaded/attachment/2890.pdf> 参照。

10. 大地震記録の碑

元禄十六年十一月二十三日 (1703.12.31) から二百年近くの明治二十八年に建てられた記念碑がある。

千葉県南房総市和田町の〔和田町史 史料集〕^{和田町史編さん室編 H3.3.31}によると次の通りである。

「一九 (歌と大地震記録の碑) 明治二八年 (一八九五) 一二月白渚区 浅間神社入口 (表)

浅間山神のくし日に 清隆
生るひと家のさかえと
つくる世阿らめや

故(こ)ゝろあるひと登(と) あおかむ 七平
千代かけて浅間迺(の) 神の高き免(め)
くみを

秋水敬♠ (書) か

建石補助人名		本社神官正木 要	威徳院 谷上 明源	沼蓮寺 渡辺 有憲	東京橋 佐久間源三	東京区 小松芳之助	東京区 村松仙之助	東京区 加藤 ヨシ	武田 要吉	富田 勇	佐藤利右衛門
		和田	山路 利七	小宮 寅一	中三原	下区	丸村	真浦	中区	白渚	栗山卯之助
		栗山卯之助	栗山 庄平	栗山 藤吉	角田 古八	辻 清兵衛	岩浪徳次郎	石井 桂藏	鈴木 治幣	鈴木 藤吉	石井 六三
		和田徳兵衛	石井 吉次郎	石井 幾藏	石井 松藏	相川 万五郎	相川 伊七郎	加藤 熊吉	林 完太郎	石井 豊吉	

加藤七平識

(裏)

元禄大地震記録

元禄十六癸未十一月廿三日夜過半時有強震
本村西白渚浅間山崩壊自南方亘西方其面積
余歩埋滅戸数五点人員廿八身今尚唱♠臺是也
東白♠中塚又罹災埋没家数四戸人♠廿余体
♠實百九十三年也♠録而爲後証
明治二十八年十二月



図-6 浅間神社の碑(地理院地図より作成)

歌と大地震記録の碑

解説

元禄一六年（一七〇三）大地震の際、浅間山が大きく崩れ、東、西両白渚で人家九戸約五〇人が埋没した。今なおびやく台といわれる所がある。

その悲惨な記録を後世に伝える碑である。」
(pp.20-21)

11. 御神輿流出返還の事

宝永四年十月四日（1707.10.28）の地震で起きた津波と海流のため、四国の須崎から伊豆の下田まで 600km 近く流された御神輿があった。

猪井達雄他著「徳島の地震津波一歴史資料



図-7 須崎・下田の位置(Google mapより作成)

から一]には次のように書かれている。

「(大日旧記聞書) ○穴喰
須崎浦八幡神輿流失の事

一 須崎浦八幡の神輿十月四日大潮に流れける伊豆の国下田浦の漁船因（もと）は沖間にて是を拾い見れば神輿なり

疎にすべきにあらずとて前社を拵え新八幡宮と祭りける 然るに拾い得たる漁夫時運得けるにや大漁をして徳付けるより遠近の浦々是れを尊み崇めける然るところに当国（土佐）の田野浦の売船江戸へ渡海の折柄 下田御所改めを受けるに入津する其の砌 件の旨を聞き後の社に行き神輿の内の書付見れば土州須崎浦八幡神輿御寄進施主の姓名を記し有是こそうたごう所にあらず 我が同国の神輿也いかでか其の俣におくべきようなしとて所の役人所へ子細 相断り是を迎い帰らん事を強いて願ひけれども浦人は是れを惜みなり なかなかむずかしくありけれども器物とは違い神輿の儀につき終には任望（まかせのぞみ）もらい得たり右 田野浦船 東武より遠揖の刻喜志和浦の弥次右衛門船行き合い須崎近浦なるにより神輿を言伝え差し越し下着して右の趣きを申し来たり神職の面々迎へに参り受け取り来たる 今の八幡の内殿に籠めこれあり 修覆はなし

右神輿伊豆の国より還行の節伊豆下田問屋役人送り状の写し其のほか右の来暦くわしく書付け八幡宮宝殿に木札に記し籠め是れあるなり右札の表に大変の節当所の一卷等くわしく書あり

右施主川渕太次より筆者に標 八郎兵衛とあり

一 当八幡宮は津野観忠公御建立代々なり大変哉 流失の宮まで則ち再興の宮なり観忠公御寄附の品数多これある所大変に流失 今こづか鎧一領残り切れに有り大変に灘より拾い集め申す由 惣毛引と申すおどしと申すなり変の前の宮まで○の御儀あり

(中略)

右 須崎浦人木屋嘉平所持持参に付き借り写し置く也

安政二乙卯（一八五五）季二月吉日写す
也 」（p.74）

12. 終わりに

編者宇佐美龍夫博士は西暦 1924 年生まれ
との事であるから、拾遺別巻を出された平成
11 年（西暦 1999 年）には 75 歳。そのお仕
事はまだまだ続く。